陸自04～06年イラク派遣

宿営地への攻撃10回超

内部報告書

陸上自衛隊が2004～06年にかけてイラク南部サマワで実施した人道復興支援活動の内部報告書全容が19日明らかになった。迫撃砲やロケット弾による宿営地への攻撃が計10回以上に及び、派遣部隊責任者が「純然たる軍事作戦」と指摘するなど緊迫した状況が記されている。不測の事態には首相官邸への連絡を優先し、情報統制していたことも判明した。

任務拡大に伴う隊員リスクの増大などに焦点が当たっている安全保障関連法案の参院審議に影響を与える可能性がある。報告書は陸自が08年5月にまとめた「イラク復興支援活動行動史」。計約430ページで2冊に分かれ、関係者は「部内の研究・教育資料」としている。「法案審議に不可欠だ」とする野党要求を踏まえ、衆院特別委員会の野党理事に提出された。

04年10月にロケット弾が宿営地内に撃ち込まれ、鉄製の荷物用コンテナを貫通して宿営地外に抜けた事案については「一つ間違えば甚大な被害に結びついた可能性もあった」と振り返っている。派遣直後のサマワの状況について、治安維持を担うオランダ軍兵士が死亡する事件や、警察署への襲撃など「油断できない状況が継続した」と説明。05年6月に陸自車両の爆発事案があったことにも触れ、「敵対勢力が存在した」と明記した。

報告書によると、派遣前の準備では至近距離の射撃や制圧射撃訓練が重視された。「最初の武器使用が、精神的にハードルが高いとの危惧」があるとして「危ないと思ったら撃て」と指導した指揮官が多かった一方、武器使用によりイラク側との信頼関係が崩れると懸念する指揮官もいた。

内部報告書のポイント

- 宿営地への攻撃は計10回以上。甚大な被害に結びついた可能性。「純然たる軍事作戦だった」と派遣部隊責任者
- 不測の事態には首相官邸への連絡を優先し、情報統制
- 派遣前の準備で至近距離の射撃や制圧射撃訓練を重視。指揮官は「危ないと思ったら撃て」と指導。隊員への精神的ケアの重要性を指摘
- 航空自衛隊は運航を不定期化し、攻撃されるリスクを減らす必要性を提言

7/20
福井